秋の日のホタル

修士 1 年　山田穂高

10 月の中旬のころ、私は調査地である金華山でシカの行動観察をしていた。やけに夕焼けの鮮やかな日で、島全体が茜色に染まっているようだった。私は眩しい夕日に目を細めながら、休んでいるシカを見て座っていた。時計を見ながら今日の調査もそろそろ終わりだなと思いつつ何気なくあたりを見回すと、オレンジ色の光がふわふわと飛び交っている。ホタル？と最初は思ったがそれにしては時期が外れすぎている。それにホタルはオレンジ色には光らない。強い夕焼けを反射して輝くそれは羽アリだった。

地面をよく見てみると、あちらこちらでアリがうごめいている。どうやら出陣式のようだ。羽アリたちは頼りない羽を一生懸命開くと、ふらふらと空へと上っていく。舞い上がったと思いきや、なぜか飛び回るトンボに叩き落とされて芝生に戻ってくる。それでも必死に体勢をたてなおしてまた飛び上がる。夕日を反射してオレンジ色に光る粒がゆらゆらと芝生から舞い上がり、それをトンボたちがつぎつぎと叩き落としていくという不思議な光景が広がっていた。私はわけのわからないままにそれを見つめていた。

金華山を歩いていると普段は経験できないことや、見られないものに出会うことがある。サルに襲われそうになったり、シカが喧嘩しているのを間近で見たり、そんなありのままの自然に触れられることが楽しいと感じる。きっと金華山は次に行ったときには、また違うものを見せてくれるのだろう。調査は楽しいばかりでもないが、そう思うと金華山に何度でも足を運びたくなる。

それにしてもトンボは何をしていたのだろうか？